ISぅ？　そんなものよりゲームだぁあああああ！

春雷海

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

檀クロトはＩＳ適正試験に巻き込まれ、偶然にもＩＳを起動してしまい、ＩＳ学園へと入学する羽目に！

壇クロト「んっ？　ＩＳ？　なにそれ美味しいの？　そんなものよりゲームを創りたいんだけど？」的な物語である

因みに、息抜き交じりの小説である。最近かけないの…。

目　次

ＩＳぅ？　そんなものよりゲームだぁあああああ！ ―――――― 1

ＩＳう？　そんなものよりゲームだあああああ！

既存の兵器を遥かに凌駕する性能を持つが、女性にしか動かせないという新兵器「ＩＳ（インフィニット・ストラトス）」が発明されたことで女尊男卑となった世界。そして、その世界を構成する重要なファクターとなり得た男子禁制であるＩＳ。

――――至極どうでもいい。

私はそう思った。そんなもの気に留める暇があったらもっと大事なことを目を向けなければならない。

わたしにとっては命ともいえるそれこそ、ＩＳよりも重要で、この命をかけてでも今後創っていかねばならない。

幼いころから抱えていた趣味であり、今もなお熱中し続けているそれを創っていくことこそが、私にとって重要なもの。

ＩＳなんぞそこらへんの女子や、ＩＳを動かしたファーストやらに任せればいい。

それよりも私にとってやるべきことをしなければならな――。

【社長！　魔界村　３Ｄが１００万本突破しましたっ！】

チャットに浮かんだその文字が私を叫ばせた。

「ぬわにぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ!?　それは本当なのか!?」

私こと壇クロトは悲鳴ならぬ喜鳴を上げた。

先程まで教員の授業中で静寂に満ちていた教室が、私の声が響き渡るものの、特に気に留めない。私は既にパソコンの画面上に映っているリモート画面につながっている幹部にしか目を向けていなかった。

ミュートにしていた音声を認識させ、その場で会話をすることに決

めた。
　チャットなんぞでもう会話する気にもならん！　今すぐにでもしゃべりたい気分で一杯だっ！
『本当です、社長！　魔界村　３Ｄがついに１００万本突破しましたっ！　そのことで取材したいとのことですっ、しかも今日です今日！』
「ふはあはははははははあっ！　これでより一層魔界村の名が広まったなあああぁぁあああああ！」
『社長、どうしますかっ!?』
「無論、取材を答えるに決まっているだろぉおおおお！　ＩＳ学園（こんな場所）にいる理由などなぁあああああああああい！」
『そういうと思いましたっ、迎えのものをお呼びいたしましたのですぐに来ていただけたらと思いますっ！』
　わたしはすぐさま帰る準備を始める。何やら凄まじい怒気やざわつきを感じるものの、それこそどうでもいい。
　あぁ今日はなんて素晴らしい日なのだろうかっ。あの魔界村が１００万本突破するとは！
「壇クロト……」
「うぅん、なにかねぇ!?　私は今急いでいるんだっ、邪魔をしないでくれたまえ！」
「貴様、今何の時間だ？　」
　凄まじい怒気を放っている黒髪の女性――確か、えぇっと、まぁ担当教師で良いか――がこめかみを引きつかせながら言ってくるも、何ともつまらない質問をしてきた。
　今が何の時間んんんだぁぁとぉおおおおおおお？

「知るかぁあああそんなことをおおおおおおおお！　わたしはとても忙しいんだっぁぁぁぁぁッぁあああああ、貴様のような年増なんぞに用はないわあああああああああああああああああああああ

ああ！」
　わたしの叫びに対して、何やら血管が切れた音と共にその担当教諭こと年増は出席簿を振りかぶった。
「今は授業中だ、このバカ者がああ！」
　出席簿の攻撃を避けた私は怒声を上げる年増の黒髪女性を見て――今ようやく思い出した、こいつは織斑千冬だと。そして、ここは私が通うこととなったクソッタレなＩＳ学園ではないかと。
　やれやれ、どうにもゲームに関わると熱中しすぎて忘れがちになるのが私の悪い癖だな……ちょっとだけ反省しなければならない。
　出勤簿を避けて、私はダッシュで教室から出ていった。
「それでは織斑千冬、私は今から取材に行くので、あとはよろしく頼んだ――ふははははははあはははっはははは！」
「まてぇぇええええええええ、壇んんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんん！」
　鬼のような叫びにも目を向けずに私は走り去っていく――途中で緑髪で教師とは思えないほど弱々しい女性とすれ違うものの。
「あっ、だ、壇クロトくんっ、勝手に出てはいけないっていうよりも、あの授業はああああああ!?」
　授業だと？　そんなものより早く取材に行かねば！

壇クロトことゲーム開発会社【クロノスコーポレーション】の若き社長であり、ＩＳ学園二人目の男子生徒――であるはずなのだが初日から問題行動ばかりを繰り返したために、問題児として認定されたのは言うまでもない。

＊　＊　＊　＊　＊

クソゲーしかねぇ。この世界に転生した私が思ったことはまずそれだった。

前世ではガチのゲーマーで、かつゲーム会社に勤めていた私。前世には様々なゲームがあった。それこそ子供や大人を魅了させる程の素晴らしいものが。

今世でもさぞかし素晴らしいゲームがあるのだろと思っていた矢先……対面したのはなんも魅力も感じないゲームばかりだった。

この世界にはあの有名なタイトルたちが存在しなかった――あるのは見たことも聞いたこともないばかりのものばかりのクソゲーばかりだった。しかも中々条件が厳しく、中々進めなかったり、キャラクターたちが矛盾するようなばかりの行動をとってアンチが多かったり、余りにも低予算で創られたであろうものばかりで、バグが多く進めなかったり、余りにも雑なステージ等々、新鮮味を感じなかった。

私の命ともいえるべきゲームたちがこんな目に合うとはっ、許しがたい、許しがたいぞぉおおおおおおお！

ｉＳなどいうものばかりに目を向けてっ、娯楽の天国ともいえるゲームをっ、こんな無残な目に合わせ折ってええええええええええええええええ、絶対に許さぁあああん！

そうだっ、これこそが私の使命なのかもしれないっ！

このゲームを侮辱するかのような世界をっ、塗り替えろというのが、転生した私の使命なのだっ！
ＩＳぅ？　そんなものはどうでもいいっ、私が今すべきなのはゲーム開発なのだっ、ＩＳで何かをするのは同じ男子である……ファースト君とやらに任せようっ！
わたしは、私はゲームを創るのだあああああああああああああああああああああああああああああ！
あぁ早く企画を練り上げ、提案しなくては――魔界村３Ｄが作れたのだっ、今度はゼルダを提案しなければならなぁああああああああああああああああああああああああああああああんっ！
「あっ、社長。そういえばご両親よりお預かりしているものがありますよ……社長専用のＩＳですって」
「ふふふっ、父さんと母さんめ、そんなものはいらないといっているのに……だがまぁ、ありがたく受け取っておくか、起動するのは学園で良いだろう」
両親からプレゼントされたドライバーと、紫色のガシャットの入ったケースを持って、私は取材に赴いた――。
【マイティジャンプ！マイティキック！マーイティアクショーン！エックス！】
これは、ゲームを愛する男が、ＩＳの世界でゲームをかたどるライダーで戦うお話――――――それよりも壇　クロトによる熱いゲーム制作の話の方が盛り上がるかもしれない……。

「……このゲームは？」
「うん？　あぁ、それか、特撮をモチーフにしたゲームなんだが、私はどうもそういうのが分からない――」
「教えてあげる、だから作って」
「むっ、な、なんだこの目は――私に何が何でもこのゲームを創らせるという強い意志を感じるぞぅうウウウ！」

ちょっとした恋愛もあるかもしれない